

正直に腹を立てずたゆに撓まずはげ勵め

〔第二十六話〕

鈴木 貫太郎



慶應三年（一八六七年）生まれの鈴木貫太郎は、明治二十年に海軍兵学校を卒業。日清・日露の両戦争で、幾度か死地をくぐりぬけ、大正の初めには海軍次官、その後、海軍兵学校長、さらに大将に栄進して連合艦隊司令長官、そして海軍軍令部長となります。昭和四年に予備役となり、昭和天皇の侍従じじゅうちょう長をつとめます。昭和十一年二月二十六日に起きた、陸軍の青年将校らによる一一・二六事件では、天皇と国民の間をへだてる者と誤解され、襲撃しゅうげきの対象となりました。瀕死ひんしの重傷を受けた鈴木を、たか夫人が身を以てかばい、奇跡的に一命をとりとめたのでした。

昭和二十年四月、天皇はもうこれ以上国民を苦しめる戦争を続けることはできないと、ひそかにお考えになり、戦争を終わらせる内閣の首相に鈴木が選ばれました。鈴木はもう七十八歳の老人でした。幾度も死ぬ目にあつてきました体です。辞退の言葉を繰り返す鈴木に対して、陛下から「鈴木の心境はよくわかる。しかし、この重大なときにあたつて、もうほかに人はいない。頼むから、どうか曲げて承知してもらいたい」とのお言葉を押し、皇太后からは「どうか陛下の親代わりになつて」と語られ、今度こそ陛下のため、国民のため、自分の生命を捧げる決意を固め、大任をお受けしました。

いつ過激な軍人や右翼に殺されるかもしれません。鈴木は万難を排して、戦争終結への道を進みます。終戦の御聖断ごせいだんが下くだつたのちも「国賊を倒せ」と襲われたほどでした。

終戦前日の八月十四日の御前会議終了後、鈴木は「私はこの国と皇室の未来に對し、それほどの悲觀はしておりません。わが国は復興し、皇室はきっと護持さ

れます。日本は再建に成功します」と告げました。

戦後は、故郷である千葉県関宿せきやどに戻り、周囲の人々に護まもられ敬愛され、やがて夫人と村人の観音経かんのんぎょうの大合唱のなかで、大往生だいおうじょうをとげます。

タイトルの言葉は、母校である前橋市桃井小学校もものいの後輩児童に与えられたもの

です。

※鈴木 貫太郎（すずき かんたろう・昭和二十三年（一九四八年）没・八十歳）

○ 戦争を終わらせる内閣の首相に選ばれた鈴木貫太郎が、自分の生命を捧げる決意を固め大任を受けたことを知り、涙が流れました。

○ 「日本は再建に成功します」と告げた鈴木貫太郎にリーダーの資質を感じました。

（M生）